

新型コロナウイルス感染症や令和2年7月豪雨、熊本地震からの復旧・復興に向けた「重点10項目」など、県政の主な動き、将来に向けて夢や希望を与える出来事、県政課題の解決に向けた取組みを積極的に進めたものを選びました。

◎新型コロナウイルス感染症対策に全力

世界的に猛威を振るった新型コロナウイルス感染症。県内では、2月に初めて感染者を確認。感染拡大防止と地域経済や県民生活の回復という2つの目標のベストバランスを目指し対応に当たった。

【感染拡大防止】3月の早い段階から本県独自の弾力的運用としてPCR検査の対象を拡充した。また、地域におけるPCR検査センターの設置に取り組むとともに、医療機関における検査機器の導入等により、各地域における検査体制の構築を進めた。さらに、病床(420床)、軽症者等の宿泊療養施設(1,430室)の確保など、医療提供体制を強化した。

また、くまモンのイラストを最大限に活用しながら、テレビや広報誌、SNSなど、様々な媒体を通して、県民の皆様への「新しい生活様式」の定着に取り組んだ。

【経済・生活の回復】新型コロナウイルスの影響を受けた事業者を支援するため、国に先駆けた県独自の資金繰り支援に迅速に取り組み、その後、国対策分と合わせて熊本地震を超える3,000億円を確保し、中小企業等の事業継続、雇用維持をサポートした。さらに、4月の休業要請に伴い行った協力金や支援金制度、拡充した国の雇用調整助成金なども活用し、パッケージとしてスピーディーな支援を行った。

また、総額10億円、20万人規模の県独自の宿泊キャンペーンや、宿泊施設が行う感染拡大防止対策などへの補助事業、飲食店や小売店に対して市町村が行う感染拡大防止対策への支援などを実施し、外出自粛等の影響を最も受けた宿泊業・飲食業を支援した。

この他、農林水産業においては、「保証料ゼロ」「5年間無利子」となる新型コロナウイルス対策緊急支援基金を創設するとともに、ECサイトを活用したキャンペーンの実施など、消費喚起に向けた取組みを切れ目なく行い農林漁業者を支援した。

また、学校では、一斉臨時休業(3月～5月)の影響を受けた子供たちの学習の保障や、心のケアに取り組んだ。

◎令和2年7月豪雨の発生

7月4日、記録的豪雨が熊本県を襲った。発災直後にいち早く自衛隊や警察、消防に出動を依頼し、多くの人命救助につながったが、死者65名、行方不明者2名という多くの犠牲者を出した。また、7,000棟を超える家屋に被害が生じ、道路や鉄道、学校施設などのインフラや、商工業、観光業、農林水産業などにも甚大な被害をもたらした。

◎被災者・被災地の復興支援に全力

熊本地震の経験や教訓を活かし、全力で復興支援を行った。

避難所については、国のプッシュ型支援を活用し、新型コロナウイルスの感染防止に配慮した段ボールベッドやパーティション、熱中症対策としてエアコン等を設置するなど、被災された皆様が安全かつ快適に過ごしていただけるよう迅速かつきめ細かな支援を行った。

新型コロナウイルスの影響でボランティアの募集地域が限定される中、災害ボランティアバスを運行し、多くの県民ボランティアが被災地での復旧作業に駆け付け、被災地の復旧・復興を力強く支えた。

宅地内の堆積土砂については、高齢者など自分で土砂を撤去することが難しい方に代わって躊躇なく市町村が直接撤去できるよう、国の補助制度が適用できない宅地において財政的な支援を行った。

災害廃棄物処理では、全国初の取組みとして、環境省、自衛隊、関係団体等と連携した「大型災害ごみの分別撤去」を実施するなど、スピード感を持って取り組んだ。

被災者のすまいの確保については、発災後1週間で木造仮設住宅の建設に着手し、12月上旬までに808戸が完成した。また、全国で初めて、自宅を応急修理する間、応急仮設住宅を一時的な住まいとして活用できることとなり、被災者の安心につながった。

生業の再建については、熊本地震の際のグループ補助金制度を拡充した「なりわい再建支援補助金」のほか、ソフト面でも活用できる国の持続化補助金、本県独自の「被災地域産業再興支援事業」などを活用し、被災事業者の事業再建を強力に後押しした。

◎球磨川流域の新たな治水の方向性の表明と復旧・復興プランの策定

8月に県、国、流域市町村で「令和2年7月球磨川豪雨検証委員会」を立ち上げ、豪雨災害の科学的・客観的な検証に取り組んだ。また、「くまもと復旧・復興有識者会議」では、「グリーン・ニューディール」という新たな復興の哲学が示された。さらに、流域すべての市町村を対象に、30回にわたって流域住民や専門家の皆様などから直接ご意見を伺った。

これらを経て、11月に、現在の民意は、「命」と「環境」を守ることであり、その民意に応える唯一の選択肢として、「新たな流水型のダム」を含めた「緑の流域治水」を進めていくことを決断。そして、球磨川流域の治水の方向性を表明するとともに、復旧・復興プランを策定した。この復旧・復興プランを住民の皆様や各市町村と共有し、「愛する地域で誰もが安全・安心に住み続けられ、若者が“残り・集う”持続可能な地域の実現」を目指し、全力で取り組んでいく。

◎熊本地震からの暮らしの再建が進む

【すまいの再建】 県独自の6つの支援策、そして、3月には災害公営住宅が全戸完成。これらの取組みにより、仮設住宅等の入居者については、ピーク時の約4.8万人から、11月末時点で約98%にあたる4万7千人を超える方がすまいの再建を実現した。引き続き、被災された全ての方々が再建を果たされるまで、全力で支援を行っていく。

【益城町の復興まちづくり】 木山地区の土地区画整理事業については、全体の約6割の仮換地指定が完了。6月からは、権利者へ宅地の引渡しを開始。11月までに28画地の引渡しが完了し、自宅再建が可能となった。一方、県道熊本高森線の4車線化については、昨年より先行して工事に着手したモデル地区が3月に完成。また、9月までに上下線約1.8キロの区間で工事に着手。このうち延べ705メートルが11月までに完成するなど、目に見える形で復興が進んでいる。

◎阿蘇へのアクセスルートが異例のスピードで開通

8月にJR豊肥本線が全線開通、10月には国道57号北側復旧ルートと現道部が震災から4年半という異例のスピードで開通した。阿蘇へのアクセスルートの開通効果を最大化するため、地域が一体となったキャンペーン「I'm fine! ASO」も実施。JR等と連携した旅行商品の造成・販売や体験型観光商品の割引販売、阿蘇の逸品を楽しめるマルシェの開催などを展開した。

来年3月には国道325号の新しい阿蘇大橋が開通する予定で、すべての幹線道路が開通する。今後も様々な観光プロモーションを用意し、切れ目のない取組みで阿蘇観光の再生を後押ししていく。

◎くまモンポート八代がプレオープン！阿蘇くまもと空港の創造的復興も進む

【八代港】 3月に、国際クルーズ拠点として八代港にくまモンポート八代が完成。10月から八代市民を対象に、11月から全ての県民を対象にプレオープンした。

高さ6mのビッグくまモンや、54体ものくまモンが並ぶ合唱隊、竹林の道が魅力的な日本庭園など、子どもからお年寄りまで楽しんでいただける、熊本の新たな観光スポットとなった。

また、12月に、本県初となる台湾との国際コンテナ定期航路（週1便）が決定。八代港から台湾への輸出が積み替えなしの3日で運ぶことが可能になり、県内はもとより南九州の物流拠点として、八代港の利便性が飛躍的に向上することとなった。

【阿蘇くまもと空港】 4月から熊本国際空港株式会社による民間運営が開始された。また、立体駐車場整備工事などに着手したほか、2023年春の完成に向けて、来月には、国内線と国際線が一体となった新ターミナルビルの工事も開始され、熊本の空の玄関口の創造的復興が着実に進んでいる。

◎熊本地震の教訓を次世代へ

【熊本地震震災ミュージアム】震災遺構や地震情報発信の地域拠点等を巡る回廊型の「熊本地震震災ミュージアム」の中核拠点内に整備した震災遺構（旧東海大学阿蘇校舎1号館及び地表地震断層）を、8月から一般公開し、4ヵ月で1万人を超える見学者が訪れた。県外からの修学旅行も受け入れており、熊本地震の教訓と記憶の継承が着実に進んでいる。

【『ONE PIECE』熊本復興プロジェクト】11月には、県内各地への設置が進む「麦わらの一味」の仲間の像に、チョッパー、ブルック、フランキーの3体の像が加わった。残る仲間の像を含め、「麦わらの一味」の力を借りて、復興を力強く進めるとともに、県内誘客につなげていく。

◎環境に配慮した取組みを推進

SDGsの理念にも沿った環境にやさしい熊本づくりが進んだ。

海の豊かさを守る取組みとして、「くまもと海洋プラスチックごみ『ゼロ』推進会議」の提言を受け、「回収」「排出抑制」「リサイクル」の3つを柱とした取組みを推進。地域や漁業、農業団体等と連携したプラスチックごみの回収や、コンビニ等と連携した排出抑制（ポイ捨て防止等）のための啓発などを実施した。

また、気候変動に対応し、2050年までに県内CO₂排出実質ゼロを目指す取組みとして、新たなCO₂削減策を募集する「アイデアコンテスト」を10月に実施した。今後も県民総ぐるみで、誰もが無理なく納得して参加できる、新たな県民運動を展開していく。

◎くまモンデビュー10周年

3月にくまモンがデビュー10周年を迎えた。新型コロナウイルスの影響により、「くまモン誕生祭2020」など次々と集客型のイベントが中止となったが、多くのお祝いメッセージをはじめ、世界的なブランド企業との10周年記念コラボ商品など、国内外のファンや企業が記念イヤーを盛り上げてくれた。

また、2019年のくまモン関連商品売上は、過去最高の1,579億円を記録。統計を始めてから8年連続で増加しており、累計売上1兆円の台も見えてきた。

4月には、新型コロナウイルス感染防止の啓発イラストを発表。その人気と知名度を生かし、マスク着用や3密の防止など「新しい生活様式」の定着に貢献した。

令和2年7月豪雨では、被災地への慰問や災害支援へのお礼訪問など、まさに、くまモンらしい、皆さんに元気や希望を届ける活躍を果たし、困難に直面した県民を勇気づけた。

【プラス1項目】

◎正代関が大関に昇進

宇土市出身の力士、正代関が、大相撲秋場所で、熊本県出身力士として初となる幕内最高優勝を飾り、大関に昇進。熊本県の新たな英雄の誕生に、県全体が大きな喜びに包まれた。

苦しい場面でも決してあきらめることなく戦い抜く正代関の姿は、困難に直面する県民全てに大きな感動と勇気を与えてくれた。

相撲界、そして熊本のスポーツ界の歴史に金字塔を打ち立てた正代関の今後一層の活躍を期待する。